

平成19年8月8日

各位

会社名 株式会社 フォトニクス  
代表者名 代表取締役社長 柄澤 憲彦  
コード番号 7708  
上場取引所 大証ヘラクレス  
問合せ先 取締役 業務管理部長 吉安 篤志  
(TEL 03-3363-7708)

## 業績予想の修正に関するお知らせ

最近の業績の動向等を踏まえ、平成18年8月31日公表の業績予想を下記のとおり修正しましたのでお知らせいたします。

### 記

#### 【I】修正内容

#### 1. 平成19年6月期期末連結業績予想数値の修正（平成18年7月1日～平成19年6月30日）

（金額の単位：百万円）

	売上高	経常利益	当期純利益
前回発表予想（A）	3,350	270	115
今回修正予想（B）	3,048	△43	△319
変動額（B-A）	△302	△313	△434
変動率（%）	△0.9	△115.9	△377.4
前期（平成18年6月期）実績	3,056	150	31

#### 2. 平成19年6月期期末業績予想数値の修正（平成18年7月1日～平成19年6月30日）

（金額の単位：百万円）

	売上高	経常利益	当期純利益
前回発表予想（A）	460	60	50
今回修正予想（B）	811	△17	△280
変動額（B-A）	351	△77	△330
変動率（%）	76.3	△128.3	△660.0
前期（平成18年6月期）実績	277	△101	△40

## 【Ⅱ】修正の理由

### 1. 連結業績

連結につきましては、精密計測機器事業では液晶・半導体・ハードディスク製造・検査装置向けの従来製品が好調であったほか、半導体関連の消耗品販売についても順調に推移しました。

しかしながら、全体として当初予想を下回った要因として、①競合他社との価格競争激化（光計測）、②新事業立ち上げの遅れ（高機能繊維）、③再生事業における不振継続（精密塑性加工）が重なったことが挙げられます。

まず、光計測事業においては、OTF 検査装置における海外向け装置が競合との価格競争の激化により売上高・利益額が当初見込みより下回りました。

次に、今期より本格的に始動しました連結子会社(株)PCF による高機能繊維製品事業については、材料から製品化するまでの過程において、消臭効果を持続させるための機能面で様々な問題点があり、製品化が遅延し今期の販売化に至らず、期待した売上高が当初見込みを大きく下回る結果となりました。さらに、これらの問題を解決するための施策として人材、設備、広告宣伝等の集中投下を行った結果、同事業で 244 百万円の経常損失を計上し、連結収益を押し下げる主要因となりました。

加えて、精密塑性加工事業を行っている持分法適用関連会社である(株)SPC の再生に注力してまいりましたが不振が続いた他、立上げ間もないその他投資先企業による投資損失を計上することで、損失額が拡大いたしました。

このように順調に業績が推移している事業を不振事業での落ち込み・伸び悩みのマイナス要因が全体を押し下げたことが今回の下方修正の結果となりました。但し、グループ全体としての要因分析と対策には既に手を打っております。上記マイナス要因のうち高機能繊維及び精密塑性加工事業については、赤字の要素を取り除く改革に目処が付いた他、フォトリソ単体財務としての投資損失計上も対応済みであり（負の資産を整理）、来期についてはプラス要因をさらに引き伸ばすことで、連結グループ全体での業績急回復を目指す所存であります。

### 2. 単体業績

単体におきましては、第 4 四半期に、当社が(株)ナノテックスへの育成事業を成し遂げた成果として、当社が保有する同社株式の一部を N I S グループ株式会社に譲渡いたしました。（6 月 29 日公表済み）。これにより、単体ベースで 347 百万円の譲渡益を計上いたしました。

当社は、投資育成事業の一環として、投資先企業の事業発展に必要な外部有力パートナーを開拓し、投資先企業の株式を譲渡することで、事業収益を計上するビジネスモデルを展開しております。平成 19 年 6 月期においては、ナノテックス社が上場後 1 年を経過して順調に業況が推移していることから、その将来性と技術力を高く評価していただける大手事業会社もしくは投資家とのパートナーシップを模索しており、6 月 29 日付けにて公表しましたとおり、N I S グループという、資金力・技術評価力に優れた譲渡先を得られました。今後のアライアンスにも道筋を付けることが出来たことは、当社投資育成事業の進展に大いに貢献し得るものと期待しております。

一方、上記の投資先企業各社の業績不振により、その投資損失として総額約 500 百万円を計上することとなり、結果として 280 百万円の当期純損失となりました。これにつきましては、上記

の通り当社グループ内の「負の資産」の全てを一掃することを目的とし、敢えて積極的に償却したものであります。このことにより、来期よりスリム化した組織体制をもって利益体質化、経営基盤の筋肉質化、さらには潤沢なキャッシュポジションの下、当社グループの有する全ての経営資源を駆使し、積極果敢に攻めの経営を実践してまいります。

### 3. 今後の対応

当社はホールディングカンパニー制導入後、経営の多角化のため積極的に新規事業を創出し、チャレンジしてまいりました。その結果、前述のような不採算事業も排出いたしましたが、その反面、当社グループの中核である半導体・液晶関連の高収益事業は非常に順調であります。今後は、潤沢なキャッシュを生かし当社の 25 年の歴史の中で育んできた、光・ナノテクノロジー分野の検査技術、測定技術といった独自技術に集中してまいります。個々の事業では、半導体関連の消耗品ビジネスが非常に順調であることや、光計測事業の生体分野への応用も着実に製品化へのステップを踏んでおります。さらに本格的に半導体・液晶分野の製造・検査装置を手掛けてまいります。また、単体での投資損失に関しては、当社グループ内での引当処理であり、早期の解消を行ってまいります。

当社グループは、光計測のノウハウを原点から見つめ直し、その要素技術の更なる発展と成長を加速化するためのマーケットへの進出を図り、競争力のある企業を目指して邁進してまいります。

以 上